

2019年12月11日

## 2018年度文学部授業改善アンケートについて（報告）

文学部長 服部 隆



## 1. 対象科目数

128 科目

## 2. 回答対象者数

延べ 6,624 人

## 3. 回答者数

4,459 人

## 4. 回答率

67.3%

## 5. アンケート実施日

2018年7月2日~7月20日

## 6. 実施の所感（記入者：学部長）

## 7. アンケートの活用方法

文学部では、2006年度の開始以来、授業改善アンケートの実施と、その集計・評価を2年サイクルで行っている。アンケート結果は、個々の教員がコメントを付け、授業改善に役立てていくとともに、文学部横断型人文学プログラムの開設、および各学科におけるカリキュラム改革の教育効果を考える材料ともなりうるものである。

今回の授業改善アンケートの結果は、おおむね平均以上の評価であったと考えるが、自由記述欄には、授業運営の参考となる学生の感想が複数あった。授業のブラッシュアップのため、各教員には活用していただきたい。また、学部・学科のカリキュラムについても、アンケート結果を踏まえつつ、2020年度以降には、授業内容の吟味とともに、新たなカリキュラムの手直しが必要かどうか慎重に検討していきたい。

なお、授業改善アンケートの結果とそれを踏まえた改善を行っていくうえで、今後考えるべき問題がいくつかあったので、最後に列挙しておく。

- ①アンケートの質問項目と集計方法については、現行の方法で十分なのか再検討が必要であるとの意見が、複数の教員から出た。文学部のディプロマ・ポリシーにおいては、「自律的」「自発的」学生の養成を目標の1つとしており、手取り足取り教えるような授業の「分かりやすさ」が求められるわけではない。またアンケート結果の分析方法についても、さらに工夫が必要である。カリキュラムの中で適切に位置づけられていれば、

学生の「授業の理解度」が低めに出る授業も、必ずしもネガティブに捉えられないのではないかと考える。

②卒業時までには時間を掛けながら「何が問題なのか」を実感していくというような、1つ1つの授業内では完結しない教育の効果をどのようにつかまえばよいかも、授業改善アンケートと並んで必要となる。ちなみに今年度は、「大学 IR コンソーシアム」の調査結果の学部データが閲覧できるようになったので対照してみた。その結果、

- ・「学生自身が文献や資料を調べる」機会が多い、入学した時点と比べ「文章表現の能力」が上がった。
- ・「専門教育あるいは所属学科の授業」に満足している。

などで他学部・他大学より高い数値が出ており、学部・学科全体の教育において、学生の「自律的」な取り組みとその効果が見える結果が得られた。個別の授業については、なお工夫の余地があると思うが、おおむね文学部の教育には問題がないと判断される。

③2015年度より開始した「文学部横断型人文学プログラム」については、2018年度に完成を迎えた。このプログラムについても、どこまで効果を上げているか、開講科目の授業改善アンケートを実施する予定であったが、予算の関係もあり、1科目のみの実施となった。人手不足による人件費の上昇に伴い、FD活動のうち外注しなければならない部分で、予算が窮屈になっている。

学部教授会やFD委員会において、現状報告とともに、今後の活動方法について、教員相互の意見交換を行う予定であるが、大学全体の予算措置も含めたバックアップ体制をさらに望みたいところである。

#### 添付資料

##### 1. 授業アンケート実施報告書

以上